

甲状腺の病気、バセドウ病をご存じですか？

門司掖済会病院 内科・副院長 佐藤 薫

1 甲状腺とは？

胸がドキドキする、手や足が細かくふるえる、食欲はあるのに痩せる、まぶたが腫れる。こんな症状があるときには、甲状腺ホルモンを測ってみる必要があります。バセドウ病など甲状腺の病気が原因のことがあるからです。

さて、みなさまは甲状腺をご存じですか？頸の前側で「のどぼとけ」の下方にある蝶が羽を広げたような形の臓器です。普通は10~15g程度で、外からみてもわかりませんが、病気になると腫れて大きくなり、一見してわかるようになることもあります。

甲状腺は甲状腺ホルモンをつくっています。ホルモンというとすぐに、性ホルモンを考へがちですが、その他にも多くの種類がありそれぞれの役目があります。この甲状腺ホルモンは子供のころには脳や体の発育に必要ですし、大人になってからは全身の代謝の調節に必要なホルモンです。

2 ヨードと甲状腺

甲状腺ホルモンは血液の中に微量存在していて、測ることができます。サイロキシン、トリヨードサイロニンの2種類があり、それぞれT4とT3と略されたりします。この数字はホルモンに含まれているヨードの数を表していて、いいかえればヨードが甲状腺ホルモンの重要な構成成分であるといえるのです。

みなさま、福島原発事故の際に放射線同位元素であるヨード131が放出されて、子供の甲状腺がんの発症が心配され、現在も超音波検査が行われていることを報道などでご存じかもしれませんね。甲状腺ホルモンを造るために、甲状腺は積極的にヨードを取り込みますが、放射線を出さない通常のヨードに混じって放射性同位元素のヨード131も甲状腺に取り込まれてしまいます。そこで出された放射線が甲状腺のがんの発生に関連すると考えられているからです。ヨードと甲状腺には深い関係があるのです。

3 バセドウ病の症状

さて、冒頭に述べましたが、甲状腺の病気の代表がバセドウ病です。

ちなみに、この病名は、1840年にこの病気を報告したドイツのカール・フォン・バセドウ先生にちなんで付けられたものです。

体の代謝を一定に保つために、甲状腺ホルモンの血中濃度は厳密にコントロールされています。

ところが、バセドウ病ではそのコントロールがはずれて必要以上に甲状腺ホルモンが造られてしまいます。その結果、全身の代謝が亢進して、ちょうど走った後のような状態になり、脈が速くなり、動悸がして、疲れやすく、手や時には足までふるえてしまいます。暑がりになって汗をかきやすくなり、食べても太らず体重が減ります。また、下痢になったり、イライラしたりします。時には心臓に負担がかかって、心房細動という脈の不整がでてきたり、心不全になって心臓のはたらきが悪くなり、息切れがしたり足が腫れたりします。また、とてもまれですが甲状腺クリーゼといって、意識がなくなり命にかかわる状態になることもあります。

しかし、多くは診断してきちんと治療すれば心配いりません。妊娠・出産を含め普通の生活ができます。

4 自己免疫が原因

バセドウ病の原因は自己免疫であることがわかっています。

ヒトは免疫の働きで、自分の体を外敵から守るために抗体という特殊な構造の蛋白を造ります。例えば、風疹に一度かかれば二度と風疹にはかかりません。風疹ウイルスに対する抗体ができるからです。

ところがまれに、自分の体の成分に対して抗体を造ってしまい、それが病気の原因になってしまいます。バセドウ病は甲状腺を刺激しコントロールするホルモンである甲状腺刺激ホルモン (TSH) の受け皿で、甲状腺の細胞にある TSH 受容体に対する抗体ができるのが原因です。この抗体が TSH のかわりに常に甲状腺を刺激するのです。

診断には、甲状腺ホルモンが高いこと、TSH が低いこととともに、この TSH 受容体抗体が存在することを確認します。そして、刺激された甲状腺は腫大しますので、最近では、超音波で甲状腺の腫れと甲状腺が刺激されて血液の流れが多くなっていることを確認します。診断が難しい時には、ホルモンが造られ過ぎている状態を確認するために、ヨード摂取率といって甲状腺にどれほどヨードが取り込まれているかをみる検査をすることがあります。

5 バセドウ病の治療

バセドウ病の治療は3つあります。薬と手術とアイソトープ治療です。

日本では、まず薬で治療することが多いのですが、国により違いがあり、たとえば米国

ではアイソトープ治療が主に行われます。薬は甲状腺ホルモンの産生を抑える作用のもので、最低 2 年ほど内服します。自己抗体が消えるのを待つ治療ともいえます。手術やアイソトープ治療などの特徴もよく知って治療法を選びましょう。

6 バセドウ病の眼の症状

「バセドウ病では眼がでる」と聞かれた方もおられると思います。バセドウ病の患者さんの全員ではありませんが、眼の症状が出ることがあります。特にタバコを吸う方に多く見受けられます。診断には眼が骨の縁からどの程度でているかを実際に測定します。

眼がでるのは、眼を動かす筋肉に炎症がおきて腫れたり、眼のまわりの脂肪が増えたり、涙をつくる涙腺が腫れたりすることで、眼球が外へ押し出されるからです。その他には、血液の流れが悪くなって上まぶたが腫れることがあります。また、眼を動かす筋肉の炎症や癒着によって、筋肉がスムーズに伸びなくなり左右の目の動きが違ってくるために複視が生じて、ものが二つに見えたりします。眼が痛くなったり、光をまぶしく感じるようになったり、時には視力が落ちてくることもあります。

これらの眼の症状は、バセドウ病が発症する前に現れたり、片方の眼だけに現れることもあって、バセドウ病による症状であることが見逃されることがあり注意が必要です。

眼の症状が悪化する際には特別な治療が必要で、大量のステロイドを点滴したり、眼の周囲に放射線をかけたりします。

7 ストレスとバセドウ病

以上、バセドウ病について述べさせていただきました。

最後に、バセドウ病にはストレスが関係しているといわれます。ストレス下におかれるとバセドウ病が発症することが知られていますし、治療中でもストレスがあるとコントロールが悪くなります。ストレスは職場や家庭での人間関係、受験などさまざまです。みなさま、ストレスを溜めない生活を心がけましょう。無理でしょうか？

門司掖済会病院

〒801-8550

福岡県北九州市門司区清滝 1-3-1

TEL:093(321)0984

FAX:093(331)7085

URL:<http://www.ekisaikai-moji.jp/>